

平成 26 年度 総合問題（生活科学科 食物栄養専攻）解答例

1 (100点)

問 1 (40点)

【採点のポイント】

- ・正しい日本語表記がされているか。
- ・近年の摂取量の変化が読み取れているか。
- ・年代による摂取量の特徴が読み取れているか。
- ・2000年と2009年の同年齢層の変化をくみ取れているか。

【解答例】

魚介類の摂取量は、1975年から2000年までの25年間はほとんど横ばいであった。しかし、2000年から2009年までの9年間で約20g急激に減少し、また、すべての年代で減少した。年齢別の違いをみると、2000年では、10-30歳代で80g前後だったのが、40歳代103.8gと増え、50歳代119.3gでピークとなり、60-70歳代では減少した。2009年では、10-30歳代で60g前後、40歳代67.0g、50歳代86.0gとなり、ピークは60歳代99.4gで、70歳代で再び減少した。

(196文字)

問 2 (60点)

【採点のインポイント】

- ・正しい日本語表記がされているか。
- ・近年の食生活の変化から摂取量の変化をとらえているか。
- ・今後のあるべき姿を自分の考えで述べているか。

【解答例】

魚介類の摂取量が減少した要因は、食の欧米化が進み肉類を中心とした食事になったこと、漁獲量の減少、調理に手間がかかること、ファストフード店、コンビニ弁当など家庭で料理をしなくとも手軽に食事ができるようになったことが考えられる。このままでは摂取量は

さらに減少するため、今後、魚介類の摂取を増やす必要があると思う。なぜなら魚介類の脂肪を含めた栄養的価値は肉類に比べて優れているからである。食育などを通して魚介類の栄養価値を知らせ、日本型食生活を普及すること、子供たちや若い年代に親しめる簡単な魚料理を普及すること、そして魚調理をはじめ、家庭で調理する回数を増やすように努めることが大切であると思う。

(297 字)

2 (100 点)

問 1 (70 点)

【採点のポイント】

- ・正しい日本語表記がされているか。
- ・朝食の欠食率の年次推移に触れていること。
- ・男女別の朝食の欠食率の推移とその違いに触れていること。
- ・年代別の朝食の欠食率の推移とその違いに触れていること。
- ・男性の 20 歳代・30 歳代は、他の年齢段階に比べて欠食率が高く 30% を超え、上昇幅が大きいことに言及していること。

【解答例】 (500 字)

朝食の欠食率の総数は男性・女性のほぼすべての年齢段階で、平成 15 年から平成 22 年までの間に上昇を続けている。また、男性の方が女性よりも欠食率が高い。

男性では、特に 20 歳代で、男女を含むすべての年齢段階に比べて欠食率が高く 30% を超え、上昇幅も大きい。また、30 歳代は 20 歳代に比べやや欠食率は低いものの、上昇傾向にあり、他のすべての年齢段階に比べて欠食率が高い。さらに、40 歳代でも欠食率が継続的に上昇を続けており、上昇幅も大きい。50 歳代の欠食率は他の年代に比べて低いものの上昇傾向が続いている。1-6 歳、7-14 歳の欠食率は低いものの次第に上昇してきている。15-19 歳については、欠食率は横ばいである。

一方、女性では 20 歳代で、男性 20 歳代・30 歳代に次いで、欠食率が高く、連続的に上昇を続けている。また、

30 歳代の欠食率も次第に高くなり、上昇を続けている。
40 歳代では欠食率が持続的に上昇を続けている。50 歳代の欠食率は他の年代に比べて低いものの上昇傾向が続いている。女性の 1-6 歳，70 歳以上では欠食率は低く、横ばいであるといえる。15-19 歳については、やや減少または横ばいである。(467 字)

問 2 (30点)

【採点のポイント】

- ・以下の観点から述べられていること。
 - ・食育に触れられていること。
 - ・ライフスタイルの改善に触れられていること。

【解答例】

- ・学校での食育を広く普及し，朝食を摂る大切さを子供たちに知らせる。
- ・学校だけではなく，家庭，地域，職場などで幅広く食育を普及して，朝食の摂取についての認識を高める。
- ・家族の生活習慣を見直し，朝食を家族一緒に取るように努める。
- ・成長期にある子どもの欠食率を改善するために，朝食を提供する体制を作る。
- ・20 歳代，30 歳代の欠食率を改善するために，職場における朝食提供の体制を整える。